「戦時下における児童文化」について（その三）

――「東日小学生新聞」の「紙上作品展覧会」における位相と展開（三）――

熊木　哲

前稿〈「戦時下における児童文化」について（その二）〉（「大妻女子大学紀要・文系」第二十九号、一九九七・三）では、「東日小学生新聞」の「紙上作品展覧会」における位相と展開に関して、昭和十三年（一九三八）の第一四半期、一月から三月までを検討してきた。この時期、国内的には、前年暮れの南京占領からの戦勝気分を引きずったままであり、中国大陸では、その後も戦闘は継続され、「戦時下」が解消する状況にはなかったということになる。こうした「戦時下」にあって、「作品紙上展覧会」の位相と展開は、一月は、前年暮れの南京占領を背景として、「戦時下」色の影響が強い作品が掲載されたが、二月、三月となるにつれて、その色彩は薄れて行ったことが確認できた。

以下、本稿では、昭和十三年の第二四半期（四月～六月）、第三四半期（七月～九月）の検討を試みる。なお、「作品紙上展覧会」以外の作品、すなわち日曜日以外に掲載された作品も適宜とりあげるが、その際には、通巻号、月日のほか曜日を付す。

一　昭和十三年第二四半期における「作品紙上展覧会」の展開

第二四半期、四、五、六月を併せて検討する。

四月は、第四七六号（四月三日）、四八二号（四月十日）、四八八号（四月十七日）、四九四号（四月二十四日）が日曜日であるが、「作品紙上展覧会」欄は、四八二号と四九四号にのみの掲載。四七六号には、掲載欄（作品も）がなく、四八八号は特別企画「懸賞募集〝日の丸綴方〟当選発表」。

五月は、第五〇〇号（五月一日）、「五〇六」号（五月八日）、五一二号（五月十五日）、五一八号（五月二十二日）、五二四号（五月二十九日）が日曜日であるが、五〇〇号は、国会図書館所蔵マイクロ資料では、この日の全ページ分が〈欠〉。なお、本来、第五〇六号となるべき五月八日の通巻番号が、一面から八面まで、すべて四〇六号と、誤植されているが、ここでは「五〇六」号として検討する。また、この号では、「紙上作品展」との欄見出しはあるものの、掲載作品は、「綴方」一作品と、「俳句」三句のみであり、紙面の三分の二を「豊島園スケッチ大会入賞者発表」に充てている。

六月は、第五三〇号（六月五日）、五三六号（六月十二日）、五四二号（六月十九日）、五四八号（六月二十六日）が日曜号。

以下、第二四半期・第四八二号から五四八号までの一一回を併せて検討する。

欄の見出しは、第五一二、五三〇号が「作品展」のほかは、企画掲載の四八八号を除き、すべて「紙上作品展」。

「綴方」は、第四八二号から五三〇号まで、及び五四八号が各一篇。五三六号と五四二号が各二篇で、第二四半期の合計は一二作品。この他、四八八号の特別企画「懸賞募集〝日の丸綴方〟当選発表」に入選作品三篇が掲載されている。

「詩」は、四八二号が二篇、四九四号が三篇、「五〇六」号にはなく、以後、五一二号二篇、五一八号三篇、五二四号三篇、五三〇号二篇、五三六号二篇、五四二号一篇、五四八号二篇の、合計二〇作品。

「短歌」は、四八二号にはなく、四九四号に三首。「五〇六」号、五一二号にはなく、五一八号に二首、五二四号に五首、五三〇号に三首。五三六号にはなく、五四二号に七首、五四八号に三首あり、合計二三首。

「俳句」は、四八二号に六句、四九四号に六句、「五〇六」号に三句、五一二号に六句。五一八号にはなく、五二四号に五句、五三〇号に二句。五三六号にはなく、五四二号に四句、五四八号に四句で、合計三六句。

「書方」は、四八二号に八作品、四九四号に一八作品。「五〇六」号にはなく、五一二号に一二作品、五一八号に一二作品、五二四号に一四作品、五三〇号に六作品、五三六号に一四作品、五四二号に一〇作品、五四八号に七作品で、合計一〇一作品。

「図画」は、いずれも欄見出しカットを含めて、四八二号に五作品、四九四号に六作品、「五〇六」号に一作品、五一二号に一一作品、五一八号に四作品、五二四号に一一作品、五三〇号に五作品、五三六号は一一作品、五四二号に五作品、五四八号に一〇作品で、合計六七作品。この他「五〇六」号には、「豊島園スケッチ大会入賞者発表」として入賞作品八作品が掲載されている。

二　昭和十三年第二四半期における「綴方」

「綴方」一二作品の内訳は、「犬の名前」（茨城県高二女子）、「宏兄さん」（千葉県二年女子）、「二塁打」（中野区六年男子）、「逓信大臣賞」（浅草区三年女子）、「タントツバ」（本所区二年男子）、「山火事」（横浜市五年女子）、「日の丸のはた」（中野区二年男子）、「僕等の先生」（函館市高一男子）、「ハナビ」（栃木県二年男子）、「お祭のこと」（横浜市三年男子）、「自転車のお使い」（東京府五年女子）、「魚つり」（埼玉県五年男子）。

これらの作品題目からも推測されるように、出征や戦場など、「戦時下」そのものに触れての内容や表現は見えない。

だが、時代を反映したものには「犬の名前」（第四八二号・四月十日）がある。この作品は、家の犬に三匹の小犬が生まれたので、その名前を、「三国防共協定にちなんで近衛文磨大臣の磨と、ドイツのハイル・ヒットラーのハイルと、イタリーのベニト・ムツソリニーのベニトを取つて、マロとハイルとベニトがいゝだろう。丁度三匹だからな」、というもの。

日独防共協定がベルリンで調印されたのは、昭和十一年（一九三六）十一月二十五日であり、一年後、ここにイタリアが参加した（一二年一一月六日）。「東日小学生新聞」では、第四四一号（昭和十三年二月二十二日）第一面のトップ記事として、次のような見出しを掲げた。

ドイツの正しい眼
ヒットラー総統、国会で
満洲国承認を声明

第四六五号（三月二十二日）の第一面には、次のような見出しが躍っていた。

日伊の契　いよいよ固し
イタリー使節団
明治神宮参拝

「イタリー使節団」の訪日関連記事は、第四六一号（三月十七日）からほとんど連日のように、その動向が報じられた。また、第四五九号（三月十五日）では、「オーストリヤがドイツに合併す　ヒ総統が堂々の指揮」と第一面トップで、ドイツのオーストリア併合を伝えており、読者にとって、ドイツ、イタリアは、身近な存在であったといえようか。

小犬を「マロ〳〵、ハイル、ベニト」と呼ぶと、「返事をするやうに、クゥ〳〵とないた」。こういった「綴方」が掲載されるほどであり、まだまだ、「戦時下」は窮屈ではなかったというべきであろう。

「タントツバ」（第五一八号、五月二十二日）は、「コンド　ミチニツバヲシタリスルト、バツニナリマスト　センセイガヲシヘテクレマシタ」とし、「ドウロニ　ハクナ、タントツバ」というポスターを町内に貼りに行ったというもの。五月一日から施行された「喀痰取締規則」が背景にあるものだが、「取締規則」を施行せざるを得ないほど目に余ったということであろうか。もっとも、悶着を引き起こした末、アメリカ・大リーグ入りを果たした某投手が、降板の際、グランドに唾をはいたとかで顰蹙を買ったのは今年（一九九七年）であった。「喀痰」が日本人の〝文化〟であるとは思いたくないが。

第四八八号（四月十七日）の特別企画「懸賞募集　〝日の丸綴方〟当選発表」での「一等」から「三等」の三篇に共通するのは、「出征」。「一等作品」の「新しい〝日の丸〟」は、なかなか買いかえなかった「日の丸」を「出征」する兄に持たせるために新しいものを買ったというもの。「二等作品」の「山かげの〝日の丸〟」は、「出征」を見送るための旗竿を伐りに入った山かげに立てられたままの「古ぼけた国旗」を発見したというもの。「三等作品」の「生きてゐる〝日の丸〟」は、「私」の家の旗は「出征された兄さんのため、村の愛国婦人会から下さった名よ（ママ）の旗」で、「日の丸のゆく所、みんな平和になります」というもの。「二等作品」で「出征」するのは、「この村」の「兵隊さん」であったが、他の二篇の「出征」はいずれも「兄」であった。

「日の丸のはた」（第五三〇号、六月五日）は、「きよ年のなんきんかんらくの時のはたぎようれつの日の丸のはたを、だいじにしてゐます」というものであり、「お祭りのこと」（第五四二号、六月十九日）に登場する「日の丸」は、「今年は戦争さわぎで私の町内ではちやうちんと、武運長久と皇軍万歳とかいてある日の丸の旗を立ててある」というものであった。

「懸賞募集　〝日の丸綴方〟」当選の三作品が、共に「出征」に関連しているということは、児童にとって、「日の丸」が「出征」と結びついた、切り放す事の出来ない光景であり、また、児童の身近な者の「出征」が日常化していることが否定できないことを思わせるところである。「戦時下」の傘がいよいよ大きく広がって来たということであろうが、「日の丸のはた」「お祭のこと」の作品を視野に入れた時、「懸賞募集　〝日の丸綴方〟」における「日の丸」と「出征」「お手が」「平和」のイメージとの結びつきには、児童の身近な者の「出征」が日常化しているという環境がそれらのイメージと「日の丸」とを直接的に結んだとのみ理解するには、躊躇するものがある。

その「躊躇する」ところは、「お父さん紙の〝東京日日新聞〟が、新日本の国民歌として、立派な〝日の丸行進曲〟を発表するにあたりまして、私たちの〝東日小学生〟では、それにも負けない皆さんの〝日の丸〟の綴方を懸賞募集致しました」とする、「懸賞募集　〝日の丸綴方〟」の性格に端を発している。

「日の丸行進曲」の当選曲が「東日小学生新聞」第一面に発表されたのは、第四五六号（三月十一日）であり、「東日小学生新聞」で「〝日の丸〟の綴方懸賞募集」が掲載されたのは、第四六〇号（三月十六日）と第四六一号（三月十七日）であった。

有本憲次の「入選歌」は、㈠から㈤までであり、その㈣と㈤は、次のような歌詞である。

四　去年の秋よつはものに

召出されて日の丸を
敵の城頭高々と
一番乗りにうち立てた
手柄はためく勝ちいくさ

五　永久に栄える日本の
国の章の日の丸が
光をそゝげばはてもない
地球の上に朝がくる
平和かゞやく朝がくる

「懸賞募集〝日の丸綴方〟」の当選作品と有本憲次の「入選歌」との影響関係を示すものは何もないが、応募者はこの「入選歌」を何等かの意味で意識することはなかったであろうか。

「日の丸」と「出征」の結び付きは、これまでの作品にも見られたところであり、入選作品が応募児童の体験であり、また、第五二五号（五月三十一日）の「出征兵」（埼玉県五年男子）などにも、「見送人は、一度に日の丸の旗をあげて、万歳を叫んだ」とあるように、「出征」風景にとって「日の丸」は切っても切れない、必ず必要なものであったともいえようが、児童における「日の丸」と「平和」のイメージの連絡には、それを連絡させたものへの関心が棄て切れない。

あるいは、両者の審査委員が重なるところにイメージの連絡を求められるかもしれない。「行進曲」の審査委員は、菊池寛、久米正雄、佐藤春夫であり、「綴方」は菊池寛、久米正雄、松波仁一郎、久留島武彦であった。

これらは、何れも確証のない憶測にすぎない。しかし、「日の丸」と「出征」との、いわば不可分の結び付きに「時代」性を読み取る可能性と、「日の丸」と「平和」のイメージの連絡の可能性とは児童にとっては同じレベルでは考えられないのではなかろうか。

三　昭和十三年第二四半期における「詩」「短歌」「俳句」

「詩」は、合計二〇作品。

「出征」（千葉県三年女子）、「星」（青森県六年男子）、「相撲」（沼津市六年男子）、「トコ屋」（荏原区四年女子）、「木の間」（東京市三年男子）、「かはいゝ一年生」（荏原区五年女子）、「道端の花」（茨城県四年女子）、「真昼」（静岡県高一男子）、「明日は遠足」（熊谷市高一男子）、「五銭」（千葉県四年女子）、「おたうばん」（東京市三年男子）、「たけのこ」（千葉県五年男子）、「春の朝」（東京市四年女子）、「るすゐばん」（沼津市四年女子）、「牛」（同前、男子）、「金魚」（東京四年男子）、「けむし」（茨城県三年）、「グミ」（茨城県二年女子）、「つゝじの花」（前橋市四年女子）、「きり」（同前）。

このうち、題名から明らかなように、「戦時下」にあるのは、「出征」（第四八二号、四月十日）だけで、他の作品には、「戦時下」の影響は見えない。この「出征」も、身内や知り合いの身に迫った「出征」ではない。

丁度出征の兵隊さんが、お出でになるのか氏神様で、
「万歳」「万歳」の勇ましい、
声が遠く聞えてくる

「遠く」から「出征の兵隊さん」が、自分の方へやってくるようだ。「私は兵隊さんが大すきだ、元気で停車場へ送りませう」と結ぶこの作品には、全く、暗さはない。ただ、ここにあるものは、日常化した出征風景とでもいえるもので、その意味では、「戦時下」が日常と化したということになろう。

「かはいゝ一年生」（第五一二号、五月十五日）は、年長者が年少者を「かはいゝ」とする、この欄によく見られる系統の作品。「明日

は遠足」（第五一八号、五月二十二日）は、題名通り、遠足の前の晩に期待で眠れない様子を描いたもので、微笑ましい作品。他の作品も、日常で目にしたものや体験を年齢相応に作品化しているもので、時勢や時代を超えて、子供達の生活風景が展開されているが、次に挙げる「五銭」（第五一八号、五月二十二日）は、見事な作品だ。同音の反復と縁語の展開によるリズムの生成は詩法を踏まえたとも思わせる出来上がり。年齢から見た時、驚きでさえある。

千葉県富浦校四年　高梨　しづ子

ころりとおとした
五銭玉
ころりとなくした
五銭玉
ころんでおとした
五銭玉
さがしてみてもみえぬ
五銭玉

「短歌」は、合計二三首。「短歌」欄のある「紙上作品展」は、検討対象一〇回のうち六回。掲載スペースからも多くはない。

千葉県二州校高二　富田　孝

入学の子等の姿を眺めつゝ幼き頃をしのぶ我かな

群馬県松井田校五年　半田　又二

おさがりの兄の洋服着てみればボタンはみんなつぶれてゐるなり

前者は、高等科二年の作品。現代でいえば、中学二年生が、小学校の新入生に抱いた感情ということになろうか。最終学年としての意識を読み取るべきか、それとも、背伸びをして、気持ちは早くも「大人」の「子供」を読み取るべきか。はたまた、このころの生徒は、早く「大人」になっていった、ならされたというべきか。

後者は、反対に、一歩、大人に近づいたと思ったら、何のことはない、お兄ちゃんの歩いてきた地点にたどり着いたことを確認させられたという思いか。「おさがりの兄の洋服」であっても、自分には自分の世界があると思っていたのに、ということであろう。兄弟姉妹のいるものであれば、そう珍しい心情でも、光景でもなかろう。この二首、「戦時下」に限らない、一種、普遍的な感情といえようか。もっとも、後者の、兄のお下がりなど着ないというのが現代的価値観であるかもしれないが。

「短歌」二三首のうち、「戦時下」の現われているのは、第五四八号（六月二十六日）に掲載の次の作品のみ。

北海道歌志内校高一　小西　吉茂

春すでにゆく頃らしわが結ぶ慰問袋の戦地に着くは

「戦地」が慰問袋の発信地からなんと遠く離れていることか、との思いが伝わってくる作品である。大本営陸軍部が徐州作戦の発動を下命したのが、四月七日。いよいよ中国大陸での戦闘は、拡大し長期戦化して行くところとなった。北支那方面軍（四個師団）は四月下旬に北から南の徐州へ、中支那派遣軍（二個師団）は五月五日に南から北の徐州へ向けた作戦行動を開始。五月十九日、徐州を占領したが、中国軍は去った後。中国軍主力を壊滅するとの作戦はその目的を果たしえず、戦線の拡大をみる結果となった。「戦地」は、いよいよ「内地」から離れ、中国大陸の奥地へと展開していった状況をこの作品に覗うことができようか。

茨城県開南校六年　栗林　安夫

英霊を駅に迎へる夕暮の空を渡り行く鳥の群れあり

この作品は、検討対象としている「紙上作品展」に掲載されたものではないが（第五二八号、六月三日・金）、戦線の拡大と長期化は、必然的に戦死者の増大となる。もはや「銃後」の児童は「出征」の見送りだけではない。「英霊」の迎えにも行かざるを得ない。

「東日小学生新聞」第四九三号（四月二十三日）の第一面には、「畏し両陛下御親拝　靖国神社臨時大祭」の見出しで、「今度の事変で輝く武勲を立て、尊い護国の人柱となつた四千五百三十三柱」の「招魂の儀」が翌二十四日に行われることを告げている。「英霊」と呼ばれ、「護国の人柱」と崇められようと戦死した父や兄は帰ってこない。「夕暮の空を渡り行く鳥の群れ」を、戦場で亡くなって行った人々ととるのは見当違いの誇りを免れないであろうが、そのように考えても差し支えない戦線事情であった。また、そうとりたい一首でもある。無論、「六年」の作品であるということを離れてであるが。

「俳句」は、合計三六句。この中で、猫を詠み込んだ作品が三句。掲載号は、第四八二号（四月十日）、「五〇六」号（五月八日）、五一二号（五月十五日）の順。

八戸市湊校高一　久保　誠一郎

小春日に猫もゐねむる日向かな

埼玉県金子校高一　上原　富枝

細い目で蝶を追ひゆく子猫かな

岩手上平沢校五年　佐藤　昭二

縁側でねこがぽか〳〵眠つてる

観察の行き届いた「細い目で」の句、日向で眠る猫たちを詠んだ長閑な句は、平和で暖かな日差しを写している。何れも「戦時下」に係わりなく、「猫」「子猫」「ねこ」を見守る視線のやさしさを感じさせる。

この他、「春空に見えつかくれつ雲雀なく」（札幌市・中村信彦、第四九四号・四月二十四日）をはじめ、春の情景を詠んだ、明るい傾向の句が多い。

宮城県松岩校高一　畠山　義之

出征の兄にかはつて野良仕事

第五四八号（六月二十六日）に掲載された作品である。父や兄が「出征」し、一家の働き手が戦場に取られてしまっている状況は、これまでの作品にも見られたところであった。

「出征」が多くの児童にとって日常化した時、第四九四号（四月二十四日）に掲載された、次の作品が現われることになる。

足立区第二校高二　根本　芳明

戦死した父に手向けん枝桜

これまでのところ、「綴方」や「詩」、「短歌」及び「俳句」を含めて、作品中に「父」の「戦死」が現われることはなかった。この作品によって、初めて「戦死した父」が読者につきつけられた。これまでにも、多くの父が、また兄が戦死していたに違いない。だが、作品として、肉親の「戦死」を内容とした作品が掲載されることはなかった。父や兄の戦死にふれた作品が投稿されたことはなかったのであろうか。投稿はされていたが、掲載作品がなかったということなのであろうか。その事情は推測するにあまりあるが、ここに、「戦死した父」が登場したことは、児童たちの肉親が「戦死」することがあり得る現実を、事実として提示されたということであろう。

児童たちは、「出征」の見送りだけではなく、「英霊」の迎えにも行かざるを得ない状況下にあったことは、「短歌」の項で確認したが、「英霊」の迎えどころか、「遺族」にも予定されていたということである。

深刻な作品だけではない。次の作品は、第五四二号（六月十九日）に掲載されたもの。

千葉県豊浦校六年　相馬　彦次

リーグ戦につゞく放送は五月場所

「朝日新聞」（昭和十三年五月十五日）の「ラヂオ」番組によれば、「東京第二放送」では、午後0時20分から「野球試合実況（明治神宮外苑野球場より）」、午後4時30分から「大相撲夏場所実況（五日目）」とある。「東京大学野球連盟リーグ戦」に続く「大相撲夏場所」の放送を心待ちにしていたということであろうが、相撲ファンの児童も多かったとみえ、「強い双葉山」と題した「詩」が第五二一号（五月二十六日・木）に掲載されている。作品の一節に、「今日も双葉は勝つのだな、六十連勝勇ましい」とあるように、この当時、双葉山が連勝記録をのばしていた頃だった。人々は、その連勝記録と日本軍の「破竹の進撃」を重ね合わせるようにさえなっていたという（講談社『昭和5』平成元年一一月）。

夏場所九日目は前田と双葉の一戦を見ようと、朝からのしと〳〵雨も平気で、大勢の見物がつめかけて、午前中でもう満員。正午、場内の拡声器が徐州の西城壁をわが軍が占領したニュースを報告すれば、満場割れるような拍手。

「東日小学生新聞」第五一七号（五月二十一日）の記事である。第一面のトップ記事「徐州遂に陥落」の下に、九日目までの「星取表」とともに掲載されたこの記事は、「銃後」生活の一端を窺わせよう。この時、「銃後」の観客は、双葉山と徐州との両方に喚声を挙げ、土俵での勝負と大陸での死を伴った戦闘とを共に喚声の対象となしたということである。「戦時下」にも未だ余裕があった「銃後」というべきであろうか。だが、「満場割れるような拍手」の一方、「戦死した父に手向けん枝桜」のように、多くの「戦死した父」と「遺児」とがあったことも事実である。

四　昭和十三年第二四半期における「書方」「図画」とこの期の概括

「書方」は、合計で一〇一作品。掲載は多いが、「戦時下」に関連する字句は、「平和使日本軍」「日本人たて」「皇軍萬歳大勝」「皇軍大勝の春」「戦争軍旗大砲」などがそれぞれ一点ずつ。掲載総数からみて、少ないといえよう。

同じ字句の作品は、二年生から四年生の「春の朝つみ草」が五点。これまでにも多く見られた六年生の「歴代神霊加護」が五点の他、五年生の「苗代田蛙鳴く」が五点、六年生の「法隆寺五重塔」が四点。三点には、三年生の「弓矢たち」、四年生の「五月晴金魚売」、高等一年の「朝踏落花暮隨飛鳥」などがある。

「天長節君が代」が二点のほか、「天皇旗最敬禮」「天皇陛下萬歳」など天皇に関する字句や「君が代」の歌詞を字句とした作品なども見られるが数は多くない。

「図画」は、合計で六七作品。風景画が二六点と最も多く、ついで静物画が一六点。「戦時下」に関係する作品は、七点。内訳は、歩哨中の兵士、戦車、子供を抱きか抱えた兵士、戦艦、城の上で万歳をしているもの、各一点。それに戦闘機を描いた作品が二点。取り立てて深刻な時局は描かれていない。

以上、昭和十三年（一九三八）第二四半期の四月、五月、六月の「児童文化」の位相と展開について検討してきた。

この第二四半期は、昭和十三年二月二十四日に衆議院本会議に上程され、議場が騒然となったという「国家総動員法」が四月一日に公布（五月五日施行）され、同月七日には、徐州作戦が開始され、中国大陸での戦線は拡大し、戦闘は長期化するところとなった。

こうした「戦時下」にあって、「綴方」には、「戦時下」そのものを題材とした作品は見えない。

「詩」作品では、題名から明らかに「戦時下」にあるのは、「出征」一作品だけで、他の作品には内容からも、「戦時下」の影響ははっきりとは見えていない。ただ、日常化した出征風景、つまり「戦時下」が日常と化したと推測させる作品もあったことは前述したところである。

「短歌」作品で「戦時下」の現われていたのは一首のみであったが、「戦地」が慰問袋の発信地から遠く離れ、戦線の拡大を推測させる作品であった。しかし、この時期には、検討対象としている「紙上作品展」に掲載されたものではない作品に、「出征」の見送りだけではなく、「英霊」の迎えにも行かざるを得ない児童が現われてきていた。

「俳句」には、「戦死した父」が現われた。これまでのところ、「綴方」や「詩」、「短歌」及び「俳句」を含めて、作品中に「父」の「戦死」が現われることはなかった。これまでにも、多くの父が、また兄が戦死していたに違いないのだが、作品として、肉親の「戦死」を内容とした作品が掲載されることはなかった。「戦死した父」が登場したことは、児童たちの肉親が「戦死」することがあり得るという現実が、事実として提示されたということ。児童たちは、「出征」の見送りだけではなく、「英霊」の迎えにも行かざるを得ない「戦時下」にあったことは、「短歌」の項で確認したが、「英霊」の迎えどころか、「遺族」にも予定されていたということである。「戦時下」の厳しい姿がはっきりと現われたということであろう。

「書方」「図画」とについては、掲載作品数が多いにもかかわらず、「戦時下」ゆえの作品は決して多くはなかったといえよう。

全般的な「児童文化」の位相と展開について概括すれば、この第二四半期では、「戦時下」の一層の拡大と長期化という状況のもと、第一四半期の後半での傾向を引き継ぎ、作品における「戦時下」色は濃くないといえよう。ただ、数は少ないものの、身内に「戦死」したものが現われた作品が掲載されるところとなり、平隠な「戦時下」などありえないことを思わせられるところとなった。

五　昭和十三年第三四半期における「作品紙上展覧会」の展開

この第三四半期の検討対象である昭和十三年七、八、九の三か月の日曜日は一三回。四月からの第二四半期の三か月も日曜日は一三回であり、このうち、マイクロフィルムが〈欠〉が一回、作品の掲載がないものが一回、特別企画が一回あり、「紙上作品展」は一〇回であった。

ところが、第三四半期では、対象の一三回のうち、「作品紙上展覧会」の見出しを持つのは第五六六号（七月十七日）、五七八号（七月三十一日）、六二〇号（九月十八日）の三回のみ。しかも、掲載面の全面を「作品紙上展覧会」に充てているのは、六二〇号だけであり、他の二回は、紙面上部の三分の一を連載読み物が占めている。

また、残り一〇回のうち、作品の掲載がないものが一回、特別企画が一回あり、これらの以外の八回には、作品掲載はあるものの、掲載紙面での占有スペースは広くはない。勿論、「作品紙上展覧会」或は「作品展」等の見出しはない。こうした見出しを振ることができないほどのスペースということであろう。

こうした第三四半期の掲載作品数は、特別企画「金を政府に売りませう」の「綴方」懸賞募集入選発表の三作品を除いて、「綴方」一三（一二）作品、「詩」一〇（二〇）作品、「短歌」一六（二三）首、

「俳句」二二（三六）句、「書方」四五（一〇一）作品、「図画」二七（六七）作品である。（　）内の数字は第二四半期の作品数であるが、「綴方」を除いて、その差は歴然としている。第二四半期にあっても「綴方」は一回につき殆ど一作品の掲載であり、第三四半期においても同様の展開であるので、こうした掲載数となったもので、第二四半期におけるマイクロフィルム〈欠〉の事情によっては同数となる可能性が多い。

「詩」「書方」「図画」の大幅な減少が物語るものは、作品掲載スペースの縮小ということであるが、その理由としては、前稿「戦時下における児童文化（その二）」（前出）でも触れたように、火曜日から土曜日（月曜休刊）に作品の掲載が行われるようになったためと推測される。

ただ、平日に投稿作品が掲載される傾向は第二四半期にも見られるものであったが、第二四半期にあっては、平日掲載作品数及びスペースがそれほど紙面を占めることがなかったため、「紙上作品展」がほぼ毎週展開したのであり、第三四半期では平日での掲載作品数が第二四半期での掲載よりも比較的多く、そのスペースも広かったことから、独立した「紙上作品展」を設定する必要がなかったものと推測される。

こうした傾向は第四四半期においても同様であり、昭和十三年の後半から、その編集方針の変更が行われたと考えられようか。

以下では、第三四半期の掲載作品の検討を行うが、本稿副題にいう「作品紙上展覧会」は、対象の日曜日一三回のうち、三回のみであり、これだけでは作品数が余りにも少ないので、「作品紙上展覧会」との見出しのない日曜日の作品も検討対象とする。

六　昭和十三年第三四半期における「綴方」「詩」

「綴方」の掲載数は、一三作品。その内訳は、「しけん」（静岡県二年男子）、「お父さんと空気銃」（群馬県花輪校四年男子）、「犬」（東京市三年男子）、「オトウサマヘ」（横浜市一年女子）、「赤いかさ」（茨城県三年女子）、「五郎ちやんの日記」（栃木市六年男子）、「ホタル」（宮城県五年女子）、「東京日日見学」（本郷区五年男子）、「寂しいお留守番」（船橋市五年女子）、「三笠かん見学」（神奈川県四年男子）、「大あらし」（埼玉県三年男子）、「うなぎ」（福島県四年男子）、「昨日の出来事」（豊島区六年女子）。

これらの作品題目からは、「戦時下」を推測させるものはないが、「オトウサマヘ」（第五七二号、七月二十四日）は、「ジョシュウハ　アツイ　デスカ」と、「徐州」にいる父親に宛てた手紙となっている。ほおずきがうまく鳴らせなかったり、ぬり絵がうまいと母親に褒められた報告や飼い猫の可愛い目をするので「オトウサマガ　カヘツテクルト、ミセテアゲマス。ハヤクカヘツテ　イラツシヤイ」とする作品。「戦時下」ゆえに、父親は「ジョシュウ」にいるのであろうが、文面は日常生活の報告であり、深刻さは見えない。

「時局柄」の内容を持つ作品は、「五郎ちやんの日記」（第五七八号、七月三十一日）。五郎ちゃんは、お友達と「がま口」を拾い、交番に届けると落し主が現われ、お礼に「五円づつくれた」ので、「そうだんをして、献金をした」というもの。

検討対象の日曜版ではないが、第六二七号（九月二十七日・火）には、「僕等の手で献金しよう」と、「愛国納豆」を売り歩くといった内容の作品「献金納豆」もある。

「東日小学生新聞」第五五九号（七月九日）には、「銃後奉公一年間」の見出しで、「支那事変」開始以来一年間で、「国防献金」などに三千六百万余円集まったことを伝えている。この「献金」のなかで、児童の「献金」がどの程度のものであったか不明ではあるが、「献金」といった形で、児童たちは「時局」に臨んでいったということか。その意味では、これは将に「戦時下」と言わざるを得ない。

「犬」（第五六六号、七月十七日）は、「ぼくは、もと、すて犬でし

たが、ぼつちやんに、かはれてゐます」というもので、「犬」の視点から書いた作品。これまで検討してきたなかでこうした手法はこの作品が唯一。作者は三年生。学年からすれば、作品を作る際の感性に驚かされる。

豊かな描写で巧まぬユーモアを生んでいるのが「うなぎ」（第六二〇号、九月十八日）。台所から猫がうなぎを咥えて逃げていくのを母親に伝えると、母は「でぶ〳〵ふとつた体を、横にふり〳〵走つて行く。後ろから僕も走つた」。しっかり太った母親がゆさゆさ走り、息子がその後を追いかけて行く様子が目に浮かぶようだ。事情を知らぬものが見れば、奇妙な親子の競争といった情景か。結局、猫は見つからなかった。「僕は後で猫の代りにおこられた」というオチもある。作者は四年生。これも「立派」の一言。

「詩」の掲載数は一〇作品。内訳は、「雨のあと」（静岡県二年男子）、「鶏運び」（沼津市高一男子）、「昼ね」（山梨県六年女子）、「教室の花」（東京市五年女子）、「教室」（東京市五年女子）、「行水」（東京市六年男子）、「すまふ」（茨城県三年男子）、「かけつこ」（茨城県三年女子）、「森内さん」（船橋市五年女子）、「橋」（茨城県三年男子）。このうち、「茨城県三年」の三名はいずれも「日立第四校」で、「東京市五年女子」は両方とも「中延校」。

「詩」も、「綴方」と同様、題名からは「戦時下」を思わせる作品はないが、「教室」（第五七八号、七月三十一日）には、次の一節がある。

東京都中延校五年　石上　玲子

お昼の休み時間、
先生が童詩を書きなさいと言つた。
皆はなか〳〵書かない。
大声で笑つてゐるものもある。
一生けんめい書いてゐる人、
ぱた〳〵あばれている人もある。
一人泣いてゐる人もある。
中にはよそのせきへ行つてあそんでゐる
教室当番が一生けんめいはたらいてゐる。
先生の机の上に
花が生き〳〵と咲いてゐる。
私の前の地図を見てゐると、
戦地にゐる
をぢさんのことを思ひだす。

「私」の席は、黒板脇に貼ってある地図の前か。地図には、占領した地名に小さな日の丸を立てたり書き込んだりした学校もあったという。東京にいる「私」は、教室の「地図」によって、戦場の「をぢさん」と回路が繋がる。「花が生き〳〵と咲いてゐる」教室が、「戦地」と回路を結んでいる。昼休みの教室。「大声でわらつてゐる」、「あばれてゐる」、「泣いてゐる」、「あそんでゐる」児童たち。「昼休みの教室」は賑やかだ。しかし、賑やかな児童たちは「戦地」と無関係ではいられない。「教室」と「戦地」とが黒板脇の「地図」で結ばれているからだ。

「戦地」と「教室」は、「地図」だけで結ばれているわけではない。

「万歳！」
幾回ぐらゐ叫んだらう。
白い軍手で答礼してくださつた先生の笑顔
ようく先生のお顔をおぼえておかう。

第三四半期の第五七四号（七月二十七日・水）に掲載された「先生の出征」（東京府府中尋高校高二・浦野幹子）の一節。

とうさんせんちはあついでせう、
日本もずゐぶんあついけど、
のぶ子もとし子もかあさんも、
ぼくもそろつて元気です。
きのふもらつた通しんぽ、
今年もうれしい甲ぞろひ、
かあさんにこ〳〵よろこんで、
とおさんおしやしんに見せました。

第六一五号（九月十三日・火）に掲載された「戦地のお父さん」（足利市西尋常校三年・桜木忠臣）の一節。児童には、「とうさん」も「をぢさん」も、そして「先生」も「戦地」にいる。「戦地のお父さん」がいれば、当然、「戦死」する「お父さん」もいる。第二四半期の検討で、「短歌」には、「英霊」を迎える作品が登場し、「俳句」には、「戦死した父」が現われたことを確認したところであるが、この第三四半期には、次のような「綴方」作品がある。

お父さんへ

静岡県三島西校三年　佐藤　恵一

お父さん、お父さんが名誉の戦死をしてからもう、五ヶ月もたちました。

僕は、お父さんの戦死のしらせをおうけした時は、うそだと思ひました。けれどそれが、ほんたうでしたので、僕は大へんかなしかつた。毎日遊んでゐる時は、忘れるけど、よその小父さんや、兄さん達が帰つてくるととてもかなしくてたまりません。お父さん、国雄やあきらちやんは元気で、おとなしく遊んで居ます。あきらちやんは、今に、お父さんが、てつかぶとをおみやげに持つて来てくれると言つて居ります。まだ小さいあきらちやんは、お父さんの死んだのもしらずに。（中略）あのやさしい顔を、ぼくは忘れる事は出来ません。お父さん、御国の為に名誉の戦死。お父さんはほんまうでせう、とお母さんは言つて居ります。ぼくが大きくなつたら、兵隊さんになつて、お父さんのかたきをうつてやります。

第六一五号（同前）、つまり、先の「戦地のお父さん」と同一紙面に掲載された。「戦地のお父さん」は、「名誉の戦死」を遂げる予備軍である。それも高い確率での予備軍である。戦死した父と戦場にいる父。どちらも、児童にとっての「戦時下」は「かなしく」不安である。「戦時下」という黒雲が、はっきりとその姿を見せ、多くの児童の上を覆っていたということである。

七　昭和十三年第三四半期における「短歌」「俳句」と「書方」「図画」

「短歌」作品一六首と、「俳句」二二句を併せて検討する。

長野県豊井校高一　神田　智（第五六六号・七月十七日）
兵隊さん難儀な所をしのぎつゝ国のためには命なげ出す
杉並桃井第三校四年　和才　信一（第五八四号・八月七日）
父さんが軍服きれば弟は支那に行くかと聞きに来るなり
京橋区京橋校六年　横森　次江　同　右
国の為身にいたで負ふもののふの力強さに涙こぼれぬ
宮城県坂元校六年　森　照男（第六二六号・九月二十五日）
皇軍の御用に立ちて伝書鳩一年あまりまめで働く

なんらかの意味で「戦時下」との関連がある作品を挙げたが、いずれも「短歌」で、「俳句」には見られなかった。第二四半期の作品の「短歌」に、「英霊」を迎える作品が登場し、「俳句」には、「戦死し

た父」が現われたが、この第三四半期では、その作品数の少ないこともあってか、そのような作品はみられない。もっとも、「短歌」一六首中、四首も「戦時下」との関連がある作品があり、その意味からは状況が良くなったわけではない。

検討対象以外の曜日の第三四半期には、次のような「短歌」作品がある。

（第五六九号、七月二十一日・木）

宮城県松岩校高一　畠山　義之

出征の兵士を思ひ我もまた八幡の神にいのりまつりぬ

群馬県豊受校高一　石川　恵三郎

新しい下駄の鼻緒のしまりよく心たのしい登校の道

静岡県見附校六年　寺田　廣二

御社に老いも若きも額づきて武運長久祈るつひたち

（第五八三号、八月六日・土）

江戸川第二葛西校六年　梅原　清

出征の勇士を囲み人々は星空の下を駅へと向ふ

（第五九五号、八月二十日・土）

豊島区長崎第二校四年　斉藤　恒意

戦線の皇軍思へば暑き日も何のこれしきとがまんするかな

荒川第一峡田校六年　箕輪　善郎

行水をしながら語るは母と子の戦地の父が思出話

第一首「「出征の兵士を思ひ」の作者は、第二四半期第五四八号（前出）の「俳句」、「出征の兄にかはつて野良仕事」の作者。「出征の兵士」は、「兄」であろうが、「兄」とせずに「兵士」としたことによって、戦場に在るもの総ての「武運長久」を願うところとなった。だが、「兵士」ではなく、「兄」の無事を祈るのがこの作者の本心ではなかったのかとの憶測は拭えない。

第二首「新しい下駄の鼻緒の」の作品背景には、戦略物資の確保のため民需品への使用制限がある。昭和十三年七月一日、商工省は、「皮革使用制限及び皮革製品販売価格取締規則」を公布し、牛皮はほとんど禁止といった状況になった。六月二十九日に「綿製品の製造制限に関する件」のほか、「綿製品の販売制限に関する件」などの四つの商工省令を公布施行し、内地民需向け綿製品供給を禁止した措置に続くものであった。

こうした物資統制が児童の日常生活にまで影響を及ぼす事になった。児童の下駄履き登校が認められたり、次のような記事が「東日小学生新聞」第五五九号（七月九日）に掲載された。

登校は草履で
作り方も習ふ
平群村小学校で

千葉県安房郡平群村小学校では、長期戦に備へて、生徒のはく革靴やゴムの運動靴を倹約することになつたので、五年生以上の生徒が四日から尾山先生にならつてゐます。これからは全校生徒が、揃つて学校でこしらへた草履をはいて通ふことになりました。

「新しい下駄の鼻緒のしまりよく心たのしい登校の道」には、物資統制の暗さはない。むしろ「心たのしい」に解釈の中心をおくべきで、「新しい下駄」の嬉しさに心はずむ様子が生き生きと作品化されている。一方、物資統制下での下駄履き登校には、「鼻緒の裏の金具が今度全廃されることになれば、濡れたときの弱りに対する工夫が要る。歯の減りにはゴムを張つてゐたが、それも統制にあふとすれば、どうするか」といった問題点も指摘された（週刊『婦女新聞』昭和十三年七月三日号。講談社『昭和5』前出）。

第四首「出征の勇士を囲み」では、「出征」が「星空の下」で行われている。入営地や入営指定時間によっては「星空の下」での「出征」も仕方のないところなのであろうが、それにしても、「召集令状」

の送達と入営時間との時間的余裕のなさが、この「星空の下」での壮行風景となったと推測される。「召集」「入営」「大陸派遣」といった、一連の動員計画で時間的短縮が求められてきたということでもあろうか。

第五首「戦線の皇軍思へば」は、やがて「銃後」の合い言葉となって行くものであった。「暑き日」だけの話ではない。やがて、何事につけても「何のこれしきとがまんするかな」と、「がまん」が強いられてくる。「戦時下」は児童にとっては、「戦線の皇軍」を盾に「がまん」が求められるものであった。要請される「がまん」が増えれば増えるだけ、「戦時下」は深まって行くものであった。

同様に「俳句」には、次のような作品がある。

（第五七三号・七月二十六日）

静岡県青島校六年　永田　礼造

出征の小父さまのうはさ夕涼み

（第五九一号・八月十六日）

茨城県鹽郷校高二　河野　都美子

遺骨をば迎えて涙新なり

（第六一六号・九月十四日）

千葉県大和田校六年　花島　一郎

幼い子父の遺骨に旗をふる

第二四半期の検討で、「短歌」に、「英霊」が登場し、「俳句」には、「戦死した父」が現われていたことを確認した。また、この第三四半期の「綴方」にも、「名誉の戦死」を遂げた父がいた。「名誉の戦死」となった父や兄は、「英霊」として、「遺骨」となって「銃後」に帰ってきた。第二句目、「戦死」の公報を受けての「涙」がどれほど流れただろうか。「遺骨」を迎えて「涙新なり」である。「がまん」と「涙」。「戦時下」にあって、この二つを強いられたのは児童に限らない。だが、児童は大人の為に、「がまん」と「涙」を受け止めなければならなかった。

第三句目、「幼い子」は未だ「がまん」と「涙」を自分のものと理解し得ていない。「出征」の見送りでは、母に抱かれて振らされたその「旗」を、「遺骨」迎えでは振っている。一人で「旗」を振れることを喜んでいるのかも知れない。「父」が「名誉の戦死」をしたことなど知らずに「旗をふる」。幼子の「戦時下」は悲しく哀れだ。

「書方」四五作品を検討する。「戦時下」故の字句は見当たらない。同じ字句での作品は、四年生の「野川えび目高」が四点。五年生の「飛行機航空路」が四点。第二四半期との比較では、第二四半期に五点見られた「春の朝つみ草」「苗代田蛙鳴く」がまったく見られない。同様に、五点みられた六年生の「歴代神霊加護」は一点。六年生の「法隆寺五重塔」が二点。同様に、三点あった高等一年の「朝踏落花暮隨飛鳥」が二点ある。これらは、掲載総数の激減から見ればその占める率は高いと言えようか。

「図画」二七作品は、爆撃中の飛行機と飛んでいる飛行艇を描いた作品が一点ずつのほかは、風景画が九点、静物画が八点、スケッチ三点など。図柄には、田植えや牧場のほか、釣堀やとんぼ取りに向う様子など、総じて長閑なものが多い。

以上、昭和十三年（一九三八）第三四半期の七月、八月、九月の「児童文化」の位相と展開について検討してきた。

七月七日は、「支那事変一周年」。この一年間、「大本営陸軍部」の発表では、戦線は、南は杭州附近から安慶、潜山、正陽関、拓城、開封を経て山西省境に及び、その全長は約二千二百五十キロに達しているという。占領した面積は百二十四万九千平方キロで、「わが国土の二倍弱」に相当。「敵が戦場に棄てた死体は五十一万余で、負傷者を合せると百三十万余」で、それに対し「わが軍の戦死は三万六千六百

二十九人」であったとする（「東日小学生新聞」第五五八号・七月八日）。

戦後、最も信用できないものの代表の如く言われる事になる「大本営発表」のことであるから、どこまで信用できるかという点はあるが、少なくても「わが軍の戦死」者数は、この数字以下ということはなかろう。これより多いことはあるにしてもだ。

第二、三四半期になって、作品に「英霊」や「遺骨」や「名誉の戦死」が現われるのも、こうした戦況があってのことであるのは、言うまでもない。「英霊」や「遺骨」や「名誉の戦死」の作品は多くはなかった。だが、それは投稿された作品が少ないことを意味しない。ただ単に掲載された作品が少なかったということだけなのではあるまいか。「わが軍の戦死は三万六千六百二十九人」とする「大本営発表」を鵜呑みできないとはいえ、この戦死者には、児童の父が、兄が、「をぢ」が大勢含まれていることであろう。悲しく寂しい思いにさせられている児童が大勢いるということである。

第二四半期までと比べ、多いとはいえない第三四半期の作品が伝えてきたものは、大陸での戦線の拡大、長期化の下で、「銃後」の「戦時下」にあっては、日常生活における物資の統制が始まり、「がまん」が求められるようになったということである。この時期、「がまん」は、むしろ精神的であるが、「戦線の皇軍」が児童たちの日常に一つの規範として意識させられることになってゆく。

「戦時下」での児童の姿を、種々の作品に見ることが出来たが、この第三四半期で最も辛い「戦時下」は、「出征」を見送ることとは、やがて「遺骨」を迎えることになるということであった。

（一九九七・一一・三〇）